

猫 蓑 通 信

第 90号
平成 25年
(2013年)
1月 15日 発行
(年 4回 発行)



同時セーフの精神で

青木秀樹

昨年の「第二十七回国民文化祭・とくしま二〇一二」は異例の開催であった。五年前に開催したばかりの徳島県での二度目の開催になっただけでなく、県が開催の責任を持つ種目は「阿波おどり」「阿波人形浄瑠璃」「阿波藍」と「ベীবン第九」だけ、それ以外は文化庁への個別申請で決定された。「連句の祭典」もその他の扱いで、東京にある連句協会が文化庁に申請して認可されたものであった。

今回の連句の祭典は「連句ルネサンス」をテーマとして、ワークショップ開催などの新しい試みもあった。開催は地元徳島県連句協会の方々にも御尽力いただき、和やかかつ大いに盛り上がる祭典となった。

今回の募吟形式は東明雅先生考案の「二十韻」であった。応募作品七百四十二巻、入選作品(選者のだれかが入選と評価した作品)二百十九巻という狭き門であったが、猫蓑会会員が捌を務めた作品が四十六巻(捌三十二名)入選している。二十韻に最も習熟しているはずの猫蓑会会

員の応募作品は入賞作品(入選作品の上位十一巻)には入らなかった。残念ではあるが、ある意味で止むを得ないことであつたと思う。その理由の一つは、連句を蕉風俳諧の現代化と捉えるよりも短詩型文芸の一種目として捉え、一句の詩としての感性を重視する選者が多かったこと、もう一つは「連句ルネサンス」のテーマを重視して作品の「新しさ」を高く評価する選者が多かったことによると思われる。

選者を務めた経験から言うと、応募作品には入賞を目指した真剣勝負の作品と、普段の練習試合の作品そのままの作品とに大別されるように思われる。ふだんの作品を応募して選者の目にとまることは、メンバーの水準が高いことの証明であろう。連句は座の楽しさが第一、作品の良し悪しはその次であるが、普段の連句の座がある種の緊張感を保っていないければならない。そしてもう一つ、私たちはふだんから連句の現代的な新しさを追求しているかどうかの反省もある。中堅・ベテランの方々にはもっと冒險をして欲しいと思う。

連句の式目は「付け・転じ」を上手く図るノウハウであり、決して禁止事項一覽ではない。式目には障らないがおもしろくない作品はいく

● 目次 ●

第九回明雅忌興行(第百二十三回例会) 作品

脇起源心九巻

平成二十四〜二十五年度正式俳諧配役

2 亀戸天神社御鎮座三百五十年奉祝興行(第

百二十一回例会) 作品 二十韻八巻 6

第三十二回俳諧芭蕉忌正式俳諧 脇起二十韻 8

「山禊」発刊の辞 根津芦文 9

猪苗代兼載忌連句大会 松島アンズ 10
事務局たより 12

らでもある。式目や季題配置を学ぶことは連句上達の基本であるが、それにとられ過ぎるのはいかなるものか。以前、明雅先生は『十七季』に歌仙の季題表を載せたのは間違っていたかもしれないと言われたことがあった。「初心者用」とか「一例」と書き加えても、それがルールだと思ってしまう人が多いと嘆いておられた。

私たちの世代は少年のころ遊びといえは草野球で過ごしたが、ちゃんとした審判なしの試合では、よく同時アウトかセーフかでもめた。座の進行役であり審判である捌は、連句の基本に大きく障らない範囲で「同時セーフ」の考えに立つ方が円満に進むように思う。そして連衆は余程のことがなければ、捌の進め方に従うことが連句のマナーである。それが明雅先生の座の持ちようであったことを思い出してほしい。

1・鳥鳥の座

脇起源心「娘も孫も」 式田恭子 捌

娘も孫も一世の契り紫苑咲く 明雅仏

芋名月のささやかな宴 恭子

運動会準備はすべて整へて 郁子

赤より白が何でだか好き 千恵子

ウ 小田原は蒲鉾無くばただの町 鄭和

お堀の鯉もおとなしき冬 泉美

ちよつかいを出して手袋落す夢 曜子

誘ひの電話心うきうき 郁子

ジャズピアノ超絶技巧あざやかに 千

ダブルワークの昼は宅配 泉

泣き虫の嬰兒あやして水遊び 曜

とことと鳩追ひかける鳩 泉

社まで花のトンネル真つ盛り 郁

土手をふらりと春日傘さす 郁

ナオ 勘亭流師匠の文字ののどらかに 千

辞書の中から恐竜の声 和

波高く沖見はるかす大型船 郁

LEDでプラモ組立 曜

書齋から突然くしゃみ響きをり 泉

羽毛ぶとんに隠す間男 和

幸せは老いて分かると夫は言ふ 恭

無我の境地で水金時 千

登山靴紐をほどけば織き月 同

卓の上には名所の酒 郁

ナウ 長続きするかしないか文科相

十年手帳飛び飛びに書く

あめつちの精気集めて花を待つ

紙風船の舞ひ上がる空

連衆 東 郁子 鈴木千恵子 高山鄭和

金子泉美 前田曜子

2・懸巢の座

脇起源心「糸瓜かな」 山田美代子 捌

ぶら下がる外に能なき糸瓜かな 明雅仏

謹厳居士に端正の月 美代子

ちちろ鳴く恩師の手紙ひもといて 碧

ウ 小腹が空けばピザを注文 やすこ

旅人と抱き合ふやうに眠る山 徹心

うち重なつて降りしきる雪 秀樹

悦楽はあの時よりもいいんです わこ

やと知つたのほんたうの愛 樹

罎堂の名演説は永遠に 樹

ベストセラーは辞書と聖書と 碧

口よりもちゃぶ台が飛ぶ大家族 心

血液型はみんなB型 樹

クルーザー花の盛りに入港す こ

君に乾杯春に乾杯 同

ナオ かげろふに撥持つ手指まだ達者 碧

猫もまどろむソファアふかふか わ

タペストリー神も仏も描かれて 同

吾子の送りに霜柱踏む 碧

引越は都心近くと決めてをり わ

第二夫人は粋な商売

銀流しどつぽにはまる深情け

オーダーメイドで白いワイシャツ

月隠れ道案内は蛭籠

匂ひ馥郁くちなしの垣

ナウ 吉右衛門お頭役を貫禄で

ローカル線の切符交換

龍のごとき幹支へられ根尾の花

青い鳥追ふうららかな夢

連衆 松本 碧 池田やすこ 佐藤徹心

青木秀樹 横山わこ

3・鶴鴿の座

脇起源心「糸瓜かな」 武井雅子 捌

ぶら下がる外に能なき糸瓜かな 明雅仏

十三夜とて集ふ友どち 雅子

虫すだくシルクスクリーン仕上げゐて 香織

壁紙の染み隠すポスター 利江

ウ 末っ子ははしやぎ飾りを置く聖樹 有子

いとしき人にそつと膝掛 醉山

告白はセーヌ河畔と決めてをり 山

抱へて走る長きバゲット 有

兄弟ちゃんばらごっこきりもなく 織

先祖たどれば政宗の従者 有

スポーツの専門チャンネル契約し 利

昼はドクター夜はDJ 織

奥の院そのまた奥の花の山 有

蝶を追ひつつそぞろ行く径 利

ナオ 読みかけの新聞飛ばす油南風

小兵横綱頼もしき首

牛乳のパックで菜っ葉よく育つ

子熊迷ひて駅のホームに

この度は田舎歌舞伎の女形なり

あのうそ泣きにころと騙され

財閥の若きプリンス電撃婚

銀座社屋でとめどなく呑む

麻のれん月影映し揺れやまず

赤いボールのよぎる噴水

ナウ分校のタイムカプセル掘り出して

夢か現か父の呼ぶ声

飛花落花ほろほろこる武者返し

連衆 平林香織 石川利江 佐々木有子

吉田酔山

4・椋鳥の座

脇起源心「殿様バツタ」

根津忠史

捌

懐かしや殿様バツタの馬面も

記念写真は銀杏散る庭

後の月奏楽の幕上がるらん

ウ 凍港の彼方怪しき船を見る

赤いルージユの襟巻の女

人生の誤解たのしむ人の妻

部屋を間違へまづはめでたし

癖になる宅配ピザのチーズ味

山

利

織

山

有

織

同

利

山

織

有

山

執筆

ユークリッドの成せる幾何学

斯くすれば国も債務は帳消しに

番頭さんの通ふ横丁

格子窓舞ひ込む花を掌に受けて

小さききしゃごの光ほのかに

ナオ 春の浜原発を村の衆

フリーサイズでシャツは完売

よく出来た鋳型のはずが少しずれ

ひびあかぎれの娘職人

寒鼻ふたり眺めてそれ以来

床の間の琴緋縮緬被せ

樽では駅長代わりの猫がある

i PSは俺が先だぜ

ナウ 肩口の鉄砲傷も薄れつつ

探偵業は情と非情で

百年経し異国の花も今盛り

遍路の笠にサインあれこれ

連衆 坂本孝子 棚町未悠 林 鐵男

西田一枝

5・朱鷺の座

脇起源心「秋の暮」

松原昭 捌

筆は一本筆は二本や秋の暮

くづし字のごと舞ひ降りる雁

山の端を月皎々と渡るらん

糸調子見てミシン踏みをり

一

男

孝

未

一

孝

史

男

同

未

孝

未

一

男

孝

男

一

史

未

ウ 首に巻くバステルカラーのフェイクファー

小指からめる底冷の宵

玉の奥爺婆付きの窮屈さ

喫煙所にとなりし公園

雲梯に懸垂すればターザンに

シラカンスを捕まへてみよ

豪華船言葉通じずまた迷子

喇叭が鳴って儀仗兵くる

苦も染も哀も隠して花吹雪

はかなく消ゆる春の夜の夢

ナオ 向島界隈歩く梅若忌

ソラマチソライエソラチカの空

登校の子らにさんさん日のそそぐ

干大根を掛ける故里

耳朶赤く染めてうつむく冬座敷

内気な娘ほどワルに恋する

をぢさんは何てつたつてサユリスト

山中教授中年の星

乾杯の麦酒突上げ宙の月

復興の地に蜻蛉生まれる

ナウ 大漁の旗ひるがへし帰る船

鎮守様へとちよいと挨拶

花見重五段に重ね山めぐり

誘ひ合はせて亀の鳴く池

連衆 上月淳子 松島アンス 野口明子

鈴木英雄

平成二十四年十月十六日
於 江東区芭蕉記念館

アンス

英雄

淳

明

ア

淳

明

ア

淳

英

ア

同

英

淳

明

昭

ア

淳

明

英

ア

明

ア

英

ア

明

英

6・金柑菱喰の座

脇起源心「割箸と」 山口美恵 捌

割箸と楊枝の語る夜長かな 明雅仏

白粥さめるやや寒の月 美恵

イーゼルを紅葉の山に定めぬて 和代

スマートフォンに入れるシャッソン 泉子

ウ なつかしき東北訛うしろから 常義

飛びついてみる外套の背 霞

悴んだ手で書き終へた恋の文 佐紀子

殖えたらいいなニッポニアニッポン 代

園庭のジャングルジムは鈴なりに 霞

大道芸はうちの父さん 泉

宇宙船どこへ行くのか千年後 義

葉をはさむ読みさしの本 代

歪みたるガラス戸越しに花の山 義

生乾きらし春泥の靴 泉

ナオ 窯守の火色うかがふ目借どき 代

あんころ餅をべろり平らげ 佐

トイレには教訓カレンダーもつともな 泉

三浪の子のどてら鉢巻 霞

出雲なる大社になぜか願をかけ 佐

千引の綱は君の髪から 義

ブラボーと言ふ唇をほしいまま 恵

愛の結実誇る太々 義

夏の月魚群の影を探り当て 代

ポトルキープの焼酎を開け 泉

ナウ 故郷を偲び稗搦節唄ふ

同期会では旧姓を呼び

貝寄風にヴィーナス生るる花やかに

ステッキを振るのどらかな午後

連衆 長崎和代 青木泉子 生田日常義

高塚霞 間佐紀子

代 泉 恵 佐

7・連雀の座

脇起源心「お福が笑ふ」 中林あや 捌

人形やきお福が笑ふ夷切れ 明雅仏

夕月ひそと町騒の上 あや

運動会鉢巻きりり締めあげて 央子

順番決めはいつも籤引 吉文

ウ 初鼓静の舞をたをやかに 暁巳

仕事始に新しい秘書 敦子

さほりたいポニーテールの揺れ具合 則子

三本立ての映画観たころ 巳

駅前の蛇屋覗いた行き帰り 則

意地悪つ子の剽軽な顔 央

党の長時代の寵児となるのかも 吉

浮世のことは金次第でふ 央

腕枕故里想ふ花の窓 敦

宅急便をひらく春宵 巳

ナオ 招魂社匂鳥つと飛び立てり 則

坂の下には古書籍の町 巳

足痛めひたすら進む万歩計 敦

鱈酒うまし生姜酒また 央

チイママはネクタイばかり褒めそやし 敦

ままよ乱れて魔女へ変身

あとつけてすぐにまかれるおたんちん 央

調子が悪いぼくのカーナビ 巳

万物を照らす月影風涼し 吉

氷金時早やも完売 則

ナウ 傘寿旅最後と集ふクラス会 央

おはじきめんこお手玉も好き 敦

民芸展出れば一面花吹雪 巳

仔猫がふいに箱の中から 吉

連衆 遠藤央子 永田吉文 島村暁巳

武井敦子 伊藤則子

8・雁金の座

脇起源心「庭十坪」 横井士郎 捌

虫鳴くや終の栖の庭十坪 明雅仏

月の光に浮かぶ晚菊 士郎

作詞家は秋惜しむ詩を書くならん 文子

抹茶に添へる取り寄せの菓子 弘佳

ウ 鮎舟すこし傾いでもやひをり 佳之子

熊手市にて拾ふ小娘 健

ちらちらと赤い蹴出しに目がくらみ 士

かかあ天下のはやもわわしき 文

格安の航空券で上海へ 弘

デフォルマシオン利かす似顔絵 佳

みかじめはヤクザ社会の慣とか 健

風雨避ければ家内安泰 士

爛漫の花枝垂れたる城の濠 文

逃水を追ひ子等の駆け出す 弘

ナオ 留学生団扇作りに興じみて

税関ぐる特上の酒

海流は島の国籍知りもせず

風邪もひかずに粘る宰相

霊長類最強称へ栄誉賞

浮気な奴と知れど入れ上げ

スマホにて百万遍のラブメール

あちらこちらにすがる蝙蝠

月涼しはつたと眺む青不動

南北アルプス踏破する夢

ナウ 玉三郎鼓童率いて金丸座

うちの爺さんおうどんが好き

地を走り空に渦巻く花吹雪

囲む雀卓笑顔うららか

連衆 橘 文子 松原弘佳 染谷佳之子

由井 健

佳

健

士

文

弘

佳

健

士

佳

弘

文

健

士

文

9・頭高の座

脇起源心「龍膽の藍」

石川 葵 捌

龍胆の藍は空より滴るか

道問ふ人の肩に昼月

頭高鸚鵡白聞き分けて

お茶の稽古に帯をきっちり

ウ 名物の郷土の菓子が大盛りに

ぬくもりのまだ残る埋火

寒いかとすぐ抱き寄せてくれた人

君が愛したイマジンの歌

明雅 仏

葵

了 斎

志 世子

路 子

美 鈴

斎

路

国連は力不足のシリア戦

ねずみの巣には隠し金あり

家政婦は見ても見ぬふりのできぬ性質

眼鏡この頃すこし合はない

矢印の右左向く花の里

刹那滅めき揺るるかげろふ

ナオ OLへすり寄るビルの捨て子猫

CIAがどこにでもゐる

密造酒ずらり並べる藁の輿

睨む瓦が屋根に凍て付く

この頃はみんなイケメン優男

草食などと言はず食べてよ

すがりつく心のよすが蜘蛛の糸

浮いては沈む蓮池の鯉

月へ手を合はず爺様と裸の子

イチローみたいになりたいと夢

ナウ 叱られて再就職の忍者です

くるりと回す裏のまひら戸

花の雨地球引力やはらかに

紙風船の終はるともなく

連衆 倉本路子 秋山志世子 鈴木了斎

松澤美鈴

同

葵

鈴

世

斎

路

斎

世

路

同

斎

路

斎

路

世

斎

鈴

葵

鈴

斎

平成二十四〜二十五年度
猫蓑会正式俳諧配役

宗 匠 坂本 孝子

脇 宗 匠 上月 淳子

執 筆 吉田 酔山

知 司 高山 鄭和

副 知 司 野口 明子

座 配 //

花 司 佐々木 有子

香 元 武井 雅子

配 硯 平林 香織

同 武井 敦子

老 長 青木 秀樹



平成二十四年十月十六日、第三十二回俳諧芭蕉忌での正式俳諧。
今年四月、亀戸天神社藤祭奉納正式俳諧でも同じ配役で興行予定

1・貌鳥の座

二十韻「スカイツリー」 本屋良子 捌

完成のスカイツリーや藤祭 良子
 赤青黄とあがる風船 美奈子
 遠足の親子の写真広げみて 美代子
 指で探つてつまむ煎餅 暁巳
 寒月に皎と影射す無人駅 英雄
 高き歓声放鷹のとき 一枝
 大伯母は自由恋愛提唱者 奈
 ハーブめかした媚薬飲ませて 巳
 横槍で合併話実らずに 枝
 風死する闇仇潜むや 英
 ナオ 早々と付いた渾名は鬼虎魚 奈
 トラックで行くギアナ高原 枝
 黒シャツにゲバラの貌を染め上げん 代
 超新星の現るる秋の夜 奈
 月よりの使者の姫君わがままで 巳
 簾名残に膝の触れ合ふ 奈
 ナウ しみじみと独り味はふ地場の酒 枝
 民話集めるみちのくの旅 巳
 里山に樹齢重ねて花の雲 代
 亀鳴く池に潮の満ちくる 英

連衆 鈴木美奈子 山田美代子 島村暁巳
 鈴木英雄 西田一枝

2・照鷺の座

二十韻「藤房の鎮まり」 松本碧 捌

藤房の鎮まりをりぬ天神社 碧
 暫し佇む芳春の庭 郁子
 小女子を母と一緒に煮上げみて 雅子
 むつくり起きる長き尾の猫 陽子
 月涼し柔軟体操海の家 鐵男
 アロハの似合ふハンサムなひと 郁
 旅芸人流し目の先誰ならむ 陽
 商店街の閑散として 雅
 寒夜にはわが国籍をあれこれと 男
 絶やさぬやうにペーチカの薪 雅
 ナオ 旧友と酒酌み交はす山の宿 郁
 座敷わらしの立てる聞き耳 郁
 湯上がりの猿がときどき存間に 雅
 夫へ中元女より来る 陽
 へんねしは深く静かに月覆ふ 碧
 岩屋に像を刻む秋冷 男
 ナウ 一斉にオラショ唱へる島暮らし 同
 野球少年賑やかな野辺 郁
 杖ついて朝夕眺む花並木 陽
 シャボン玉には七色の夢 雅

連衆 東郁子 武井雅子 佐藤陽子
 林鐵男

3・子雀の座

二十韻「翁の旅」 秋山志世子 捌

藤咲くや翁の旅を思ひつつ 志世子
 春日傘行く橋のをちこち 恭子
 せがむ兒に紙風船を折りやりて 常義
 おやつはいつもチョコと煎餅 敬子
 江戸三座夢の跡地に夏の霜 泉美
 金魚売りにもひとめぼれする 恭
 女子寮は恋の噂の酣に 義
 きしと鳴つてる古い窓枠 恭
 原発の取換へられぬ温度計 泉
 サッカーボール胸に抱きしむ 敬
 ナオ クリスマス帰宅できない男たち 義
 どんなことにも吠える柴犬 恭
 和尚呼びけふもほろほろ酔うてゐる 泉
 美術の秋とヌード挑戦 義
 鐘の鳴る月夜の夫は吸血鬼 恭
 国会答弁赤い羽根付け 敬
 ナウ かるがると濁り世生きて卒寿なほ 同
 辿れば遠し故郷の山 世
 合唱のまとまりよくて花の宿 義
 縁側に舞ふ黄蝶白蝶 泉

連衆 式田恭子 生田日常義 須賀敬子
 金子泉美

4・引鶴の座

二十韻「藤日和」

松原弘佳 捌

やはらかに紫の風藤日和 弘佳
 亀鳴くやうな池の中島 泉子
 抽斗の春のスカート選びぬて 芙美
 予定のひとつキャンセルにする 則子
 おでん屋の屋台路地行く月を連れ 醉山
 撫でてやりたい悴んだ指 泉
 あなただけ私の部屋に入れたのは 則
 税務署員はにっと笑った 芙美
 週末はカリブの海へ自家用機 山
 星も聴き入るテナーサククス 同
 ナオ 泡盛に戦友偲ぶ同期会 泉
 城壁もたれ夏やせの犬 芙美
 キングよりジャックが好きとクイーンが 泉
 喘の間に秋蛭飛ぶ 山
 月明り円空仏に見る涙 芙美
 牧場の柵にコスモスの揺れ 則
 ナウ 急坂を五輪候補の黙々と 山
 記録映画は満員御礼 弘
 花吹雪大地隈なく被ひけり 泉
 のんびりとして谷の鶯 則

連衆 青木泉水 間瀬美美 伊藤則子
 吉田酔山

昨二十四年四月二十四日当日の実作会では、全十一巻の二十韻が巻かれましたが、うち、六番（前田曜子捌）、九番（武井敦子捌）、十一番（由井健捌）の三巻の作品は、既に昨年七月発行の「猫襲通信」第八十八号に掲載しています。今号に掲載した八巻の作品は、各捌き手が昨年の国民文化祭連句大会に応募したため、掲載を延期していたものです。

5・匂鳥の座

二十韻「神酒ふふみ」

棚町未悠 捌

神酒^{みき}ふふみ畏まりけり藤祭 未悠
 太鼓轟く春の闌 アンズ
 総ルビの全集の文字かぎろひて かりん
 鶴亀算を子に教へやる 蓉子
 五輪への予選を通り月涼し 吉文
 網戸の奥に重なりし影 ん
 鼻ゆ糸のシラノの悲哀胸を衝き 蓉
 エアーギターを猛烈に弾く ア
 虎猫が隅からじっと見詰めをり 吉
 世界遺産の百塔の街 蓉
 ナオ 雪催ひ牡蠣剥いてゐる大男 ア
 鞭の指なれどいとほし ん
 浅草の小町と呼ばれ浮名立ち 吉
 あちらこちらに朽ちし恋塚 ん
 月円か気配に虫のおし黙り ア
 望遠鏡を向ける流星 吉
 ナウ 訪ね人迷ふ山道冷まじく ん
 コイン占ひいつも勝ちます 蓉
 花衣ふと触れあうて多生の縁 ん
 朝市に売る若布青海苔 ア

連衆 松島アンズ 登坂かりん 五味蓉子
 永田吉文

7・雲雀の座

二十韻「藤間より」

高山鄭和 捌

大祭やスカイツリーは藤間より 鄭和
 橋のたもとの鶯は上向 忠史
 一升の菜飯あをあを炊きあげて 千恵子
 チャイムに覗くドアモニター 久美子
 月を追ひ駆け出すすらに北風 純子
 氷江いくつ越えて道行 千
 夫の留守マダム・チャタレイ森の小屋 史
 スマフォでメール愚痴の長々 純
 政局でなくて政治を求められ 美
 三代目には背広びつたり 史
 ナオ 夏負をしても夏瘦知らぬまま 千
 泥鰌鍋食ふ神田界限 美
 夢希望みんな持つてく末娘 純
 美男蔓に軒を奪はれ 千
 村芝居柵の音響く居待月 史
 鬼の捨子の揺れを楽しむ 純
 ナウ 酒ほどほど終の住処にしつくりと 美
 まちこがれゐる友の絵手紙 史
 花の山濃きも淡きも重なりて 千
 ただひたすらに跳ねる若駒 美

連衆 根津忠史 鈴木千恵子 副島久美子
 近藤純子

平成二十四年四月二十四日
 於 亀戸天神社

8・山鳥の座

二十韻「けさの藤」

高塚霞 捌

池の面に淡き香りやけさの藤 霞

太鼓橋には亀鳴くといふ 美恵

春装のシューウインドウを覗くらん 節子

甘味処で団子甘辛 徹心

ウ 月涼しこころ静めて墨を磨り 遊民

短夜に解く恋のなぞなぞ 心

パスワード教へてあげる貴方なら 民

ふと踏み外す螺旋階段 節

五線紙に踊る音符の楽しくて 恵

おでこの痛むハリポッター 同

ナオ くつさめのつぎつぎ移る映画館 同

凍てつく道を自転車が行く 節

平均台夢の大技びたり決め 民

ハグする腕をすり抜ける美女 節

忘れぬひとの倅細き月 心

一本杉の上を秋雲 霞

ナウ 新走り青道心のほろ酔うて 恵

ギター担いで頭陀袋下げ 心

花燦燦やまなみハイウェイ続きをり 節

巣立ち待たるる念願の雛 民

連衆 山口美恵 長坂節子 佐藤徹心

内田遊民

10・頬白の座

二十韻「天神の眠り」

平林香織 捌

天神の眠り覚ますや鴛の鳴く 香織

笙筆築も春惜しむ頃 佳之子

風炎の逆巻く街を走り来て 士郎

飲み比べする自販機の水 路子

ウ 月涼しのれんを分ける若女将 利江

酔うたふりして腰へ廻す手 路

姉婿の味な目つきに出来心 之

微熱続きで悪い夢見る 士

フロイトもユングもこなすカウンセラー 利

哲学の道せせらぎに添ふ 士

ナオ 冬蚊叩く場末の酒場高き椅子 之

独りで向かふ狼の群 士

赤頭巾かごを抱へて森を行く 利

まづは聞き出すメールアドレス 之

時は今唇奪ふ月の下 路

政権交替霧はれぬ街 織

ナウ ラケットをそれてボールは刀豆に 路

ひとと言多き婆が顔出す 之

野の末の地蔵の笠に花の雨 士

手をつなぎ行く暮れかぬる土手 利

連衆 染谷佳之子 横井士郎 倉本路子

石川利江

俳諧連歌

脇起二十韻「しぐるるや」

しぐるるや田の新株の黒むほど 翁

みな畏まる炉開の席 秀樹

三代目秘伝の餡を練り上げて 淳子

都心につづくアーケード街 良子

ウ 月挿頭すスカイツリーは川の面に 郁子

そぞろ寒にはそつと寄り添ふ 有子

虫の音に醒めて恥づかしみだれ髪 明子

古代風呂てふ朽ちし石組 鄭和

旅の母掏摸と置き引き用心し やすこ

この頃少し酒もいけるワ 千町

ナオ 羅でキーツの詩集口遊ぶ わこ

金星背に隠す夏月 路子

犬の前知らんぶりして通る猫 敦子

昔の恋に未練今更 雅子

百年の眠りを覚ますキス熱く 香織

産土神へ御礼参りに 弘佳

ナウ 健康の器具が廊下を埋め尽くし 恭子

人なつかしき啓蟄の頃 常義

散り初めし花には鯛の薄作り 孝子

被り慣れたる軽き春帽 執筆

平成二十四年十月十六日 首尾
江東区芭蕉記念館に於いて興行

「山襖」発刊の辞

根津芦丈

昭和三十九（一九六四）年一月二十日刊

「山襖」創刊号より転載



「山襖」創刊号の表紙。第二号からは、題字の書き順が、発行元の書き順と同じく左から右へとなる

俳諧は、定型を守り、リズムを命とし、実の他に何もものもないと考える。人は、おのおの生活環境を異にしている。遠くに求めずとも、身辺にありて五官にふるる事物を深く掘り下げて詠めば足る。芭蕉の謂ふ句と一枚になるとはこれであり、また、造化に随い造化にかえれ、と云われるのもここからである。

定型を捨て、リズムを忘れたるものを俳句と云いうるか。現今の俳句界を見るに、定型を破壊し、リズムを無視するをもつて新しと盲断、さらに、このバスに乗りおくれじと焦燥するものがはなはだ多い。円画に沿うて走れば、先んずるものが後れたるものしりべにつくの奇観を呈すと。古人の言をそのまま演じ、はては定

型をいかに処置すべきなどと放言するものさえあるに至つた。まつたく、笑いごとで済まされぬ。

その一方、連句界を見るに、俳句における明治の一先覚者の軽率不敏なる独断に雷同し、非文学なりとて、食はずぎらいに背を向け去つたもの多く、加ふるに、関心を持つ人々も堪能なる先輩のあるの知らず、単に制約の書をながめ、註解書による知識に頼りて道に入ろうとするの誤りを犯したものが多数ある。

特に、この註解書には、範とするに足らぬいな、做うてはならぬ曲解悪解が頗る多い。これに感染したがさいご、いわゆる泥沼に踏みこんだと同様で、とうてい救いの道はないと云うてよい。学名高い人々の中にも、こう云う泥沼組は決して尠くない。

一体、蕉風の連句は、自ら咀嚼して味ふべきものであつて、註解書などによりて易々と達成しうるほど単純ではない。古人も、近來これに註解をさえ加えて玄妙の風趣を失う、とも云つて居る。至言である。

今回、社中の二三子より、月々の集句をたどえ三枚にても綴りものにして欲しいとの希望があり、かつまた、私自身、自分の雑誌を持てば何人にも掣肘されることなく、忌憚なく誤りは糺し、曲釈悪解に対しても十分メスを揮ひうるものに魅力を感じて、あえてこの難事業に着手する決心をした。側近の同志と相はかり、多年の風交家に、一枚一枚のはがきをもつて意を通

じ、協力を求めたるころ、快よく応諾を得た同人の数、すでに百余人に至つた。今更ながら責任の重大なるを覚えずにいられないが、冀くば、各自この雑誌を自己の俳諧道場として、優秀なる作品を数々ご寄稿あらんことを切望いたします。

解題●この「発刊の辞」に続いて掲載され、それと呼応するような「山襖の首途に餞す」と題する一文の冒頭で、高津才次郎丈は次のように述べている。

「円熟社が明治十四年に馬場凌冬に依つて創立されて以来、堅実な歩みを進めて八十年に達したことは、正に全国に数ある諸社中の希有な一例である。その記念として昨年四月、社員の内千句贊助員二〇〇人の詠各五句に、連句四十五巻を加えた見事な、「草原集」を刊行。これを契機として、従来月々の集句一枚刷なるを改めて新に「山襖」と冠称する雑誌を隔月に発行することとなり、社運の前途益々洋々たるを約束する。現在の社長は、凌冬、那美女、翠幹、黙堂の後を受けた根津芦丈である。社史によると、氏が正社員として名を列したのは明治二十八年、顧問となつたのは大正十年、社長となつたのが昭和十年で今日に及ぶ。氏今寿齡九旬を迎え、老益壯前後数十年を貫いて、幾多の後勤を提擲しつづけるは誠に驚嘆すべきである。」

「山襖」はこのように、立花北枝から馬場凌冬に至る師系を継ぐ俳諧結社「円熟社」の、今風に言えは「結社誌」という形をとつて創刊された。実際、俳句の投句欄など、現代の俳句結社誌、同人誌の体裁に通じるところもある。しかし、通常の俳誌と違って、連句の占める比重が非常に大きい。芦丈翁が結

社の社長（今風に言えば「主宰」）を引き継いでから二十九年も経った九十歳の時点で、あえて隔月刊誌の創刊に乗り出したのはなぜか。その意欲、こころざしの高さは「発刊の辞」にも明らかだが、これを「円熟社」という一結社の成り行きからのみ説明、理解することはできないだろう。

芦丈翁のご令孫にあたられる根津忠史氏によれば、この意欲の高揚は明らかに、その三年前、昭和三十六年から、信州大学で「信大連句会」の連衆を指導し始めたことによっている。信大議長をはじめとする教授、研究者、学生、それに学内にとどまらない松本市の知的人士、そういう、創作力だけでなく強い発信力、影響力を持った人々との出会いに

第三回兼載忌記念連句会講演会・吟行会に参加して

松島アンズ

二〇一二年十一月

二十四日から二日間、

第三回兼載忌記念連句

会に参加した。雪の天

気予報が心配された

が、東北新幹線の窓外は小春日和の景色が続いた。郡山から磐越西線に乗り換えてしばし、初めて見る猪苗代湖と磐梯山である。

兼載とは、室町時代後期、花の下宗匠も務めた連歌師である。高校時代の国語の教科書に、一条兼良や応仁の乱を避けて地方へ落ちてゆく連歌師達の登場する小説の抜粋があり、これ



吟行会では喜多方の酒蔵で利き酒も

よって、それまで全国の旧派の連句人との交流を通して細々と守り続けてきた蕉風俳諧の灯が、現代の文芸として大きく燃え立つ可能性が見えてきた。なかんづく、信大連句会結成の前提として、信大の東明雅教授と出会ったこと、東明雅というよき後継者を得たことが重要である。自らが蓄積してきたことを、実作を通じて、またそれだけでなく理論的な論述を通じて、後進に伝え尽くしておきたい。そういう新たな意欲が、卒寿にしての「山襖」創刊の原動力だ。それが忠史文のお考えである。

「発刊の辞」を味読すれば誰しもそのことを得心するに違いない。また、昭和五十八年の東明雅師による「季刊連句」の「発刊の辞」にも、そのころ

が私の連歌についてのささやかな基礎知識である。心敬、宗祇のことは、その折学んだように思う。

猪苗代兼載というインパクトある名を初めて聞いたのは、茨城国文祭の前年、古河市で催された連歌についての講演会のことであった。古河公方足利政氏に招かれた兼載は、古河を終焉の地としたのであった。苗字には各説あるのだが、猪苗代氏からは、即座に福島猪苗代湖が連想され、当時はかなり辺鄙であったと思われる東国出身の連歌師について興味を感じ、旅する連歌師のイメージが膨らんだ。

その二年後、伊藤哲子さんの平成連句競詠会の席上、会津の田中雅子さんが、兼載五百年遠忌の記念祭を催す挨拶をされた時、ああ、あの兼載さんと、懐かしい人を思い出したような気がした。記念祭奉納の『諸国付廻百韻』には、

ざしが高々と反響していることを感得できるに違いない。「季刊連句」の「発刊の辞」は、最近では「猫蓑通信」の第七十七号（平成二十一年十月刊）に再録、また猫蓑会オフィシャルサイトにも収録されているので、ぜひ併せてお読みいただければと思う。

東明雅師の『芦丈翁俳諧聞書』にみられる芦丈翁の伊那弁の語り口には独特の魅力があるが、この「創刊の辞」の文体も、新旧の仮名遣いが入り混じる独特のものであり、あえて、それをどちらかに統一するさかしらるを避け、そのまま転載収録した。

「山襖」誌をご貸与くださった東都子様、武井雅子様に、また、記事転載をご快諾いただいた根津忠史様に御礼申し上げます。（編集子）

私も声をかけていただいた。田中さんはその日参会者にお土産の可愛い小法師人形を下さった。親指大で赤白黒に塗られ、家内安全の縁起物とのこと。余談であるが、この小法師は震災の時、新宿で帰宅困難となり、一夜明けて帰宅した我が家の床一面散乱した本や陶磁器、ガラスの下から無傷で現れて元気に起き上がり、私を勇気付けてくれたのであった。

このようないきさつの後、初めて訪れる会津である。集合場所の猪苗代駅に降り立つと、空気が乾いて、きりつと冷たかった。同行四十名の連句人の皆様とご挨拶を交しながら、吟行責任者の田中雅子さんと在京スタツフの林鐵男さんの用意してくださったバスに乗り、湖畔の小平瀨ひらがた天満宮へと向う。

ガイドの方からこの地に伝わる兼載出生の天満宮奇瑞譚を聞く。子宝に恵まれなかった醜い



「山は雪海は氷のかゝみ哉」の兼載発句碑を前にした筆者

母の信心と神から授けられた天才少年。幼年時代から出家して連歌師になってゆく青年時代の物語はまるで大河ドラマのようだ。小平潟地区には兼載が続いて、保科正之、野口英世と偉人が一筋の流れの中に語り継がれて、地元での尊敬と敬愛の念が感じられた。

天歴二（九四八）年鎮座という天満宮は、雪囲いされて、真正面の猪苗代湖を渡ってくる風に四手や旗が揺れていた。たくさんの絵馬が奉納され、中には算額もあると説明を伺う。これは思いがけないことで、というのは、私が百韻に付けた句は和算であったから、なんだか無意

識に菅原道真公のミットにストライクボールを投げ込んだような気持ちがあった。謹んで歌道上達を祈念する。

よく整備された小平潟地区の記念碑のひとつに

山は雪海は氷のかゝみ哉 猪苗代兼載

知識や伝記ばかり先行したけれど、ここで私は、百韻の発句（花もみじ夏こそ盛り庭の松）は別として、初めて兼載の作品と出会ったのである。大きく開けた景色の中、明るくて力強い句である。

午後は、会場を移して、聖心女子大学名誉教授奥田勲氏の講演「猪苗代兼載―故郷と歌」、パネルディスカッション「猪苗代兼載の実像に迫る」（パネラーは、猪苗代教育委員会教育長土屋重憲氏・埼玉県立皆野高校教諭戸田純子氏・会津若松ザベリオ高校教諭田中雅子氏・歴史研究家澤井恵子氏。コーディネーターは、猪苗代の偉人を考える会の小松山六郎氏）を聴き、兼載の人生が明らかになってきた。

幼名「梅」、自在院にて出家（六歳）、「興俊」の名で河越千句に参会（十九歳）、心敬・宗祇との交わり、宗祇の宗の一字の「宗春」となり、次いで、文明十八年「兼載」と改名（三十五歳）、禁裏に百句連歌を献じ、宗祇のあとを受けて北野会所奉行・連歌宗匠に就任し（三十八歳）、『新撰筑波集』完成へ選者宗祇を助け、帝の御製連歌に加点するなどの活躍ぶりである。その名の

変遷が彼の自己確立の経過を示しているとの指摘があった。また、資料に残る兼載の連歌批評の切り口に見える気性についても言及があった。

パネラーの澤井恵子氏は、兼載の出生伝説成立事情について会津藩主保科正之の編纂の『会津風土記』等の存在を話され、小平潟伝承の物語と、兼載を顕彰する地元との結び付きの強さに納得した。昭和三十四年には四百五十年忌も修されているのである。

特典として参加者に配布された限定版『猪苗代兼載連歌集』を読むと、兼載の明晰さ直截さを感じる。連歌を楽しんでいる雰囲気伝わってくる。「持経のついでに。十三仏の御名を百句のかみにをきて。連歌沙汰して手向侍りぬ。」の独吟百韻など、自由自在の心境ではないだろうか。

夕方からは地元の方を交え九卓に分かれて連句実作会となり、その後、会津若松のホテルへ移動して、懇親会が開かれた。

二日目は喜多方方面を案内していただき、酒蔵の利酒もして、午後の列車で帰宅の途についてた。

滞在中のお膳に会津の郷土料理「こづゆ」が供されたが、私はその滋味深い味わいを家でも再現したくてレシピを取材。材料の「まめぶ」と会津塗りの手塩皿を求めて帰った。「こづゆ」は兼載も賞味したであろうか。試作するたび、記憶の味に近くなり、吟行会の余情を楽しんでいる。

●俳諧芭蕉忌正式俳諧・明雅忌興行（第百二十三回例会）が開催されました

昨年十月十六日火曜日、江東区芭蕉記念館にて、第百二十三回猫養会例会が開催されました。まず俳諧芭蕉忌正式俳諧興行が行われ、続いて九卓に分かれて、東明雅先生発句による脇起源心を興行し、全席披講のち、午後五時に閉会しました。当日の正式俳諧二十韻（芭蕉翁発句による脇起）は、今号のP8に、また脇起源心九巻は今号のP2～P5に掲載されています。

●第二十七回国民文化祭・とくしま2012文芸祭「連句の祭典」が開催されました

昨年十月二十日土曜日午後1時から、徳島市の徳島グランヴィリオホテルにて連句体験ワークショップが、また午後六時から懇親会が開催されました。翌二十一日午前十時から、四国大学交流センターにて、アトラクションと募吟各賞授賞式、続いて連句実作会が開催され、午後四時に閉会しました。

●第二十八回やまなし国民文化祭文芸祭「連句の祭典」プレ大会が開催されました

昨年十一月十七日土曜日午後十二時三十分から、甲州市勝沼ぶどうの丘にて、連句実作会が開催され、午後四時に閉会しました。

●今後の予定

・平成二十五年初懐紙（第百二十四回例会）
平成二十五年一月二十日（日曜日）
十二時～十七時（受付十一時より）

於 ホテルフロラシオン青山

・平成二十五年藤祭正式俳諧（第百二十五回例会）
平成二十五年四月二十五日頃
於 亀戸天神社

・平成二十五年（第二十三回）同人会総会
平成二十五年六月十六日（日曜日）
於 新宿ワシントンホテル新館

●猫養基金にご協力ありがとうございます
基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店
猫養基金 普通預金 3376045

●猫養作品集第二十二巻を刊行します

七月頃を目処に、猫養作品集第二十二巻を刊行します。猫養会員は各自揃った作品を一人につき一巻掲載することができます。締切は二月末日、応募料は二千円（作品集一冊の代金込み）です。ふるってご応募下さい。

今回から、ページ立ての方法が変わります。詳細は、今号に同封した応募要項を参照して下さい。

●各種募吟にふるってご応募ください

●第二十八回国民文化祭・やまなし2013文芸祭「連句の祭典」

形式…半歌仙
締切…平成二十五年五月十日
応募料…一巻につき二千円

●第十七回えひめ俵口連句全国大会
形式…歌仙（平成二十四年五月一日以降の未発表作品に限る。独吟・脇起不可）

締切…平成二十五年一月三十一日必着
応募料…一巻につき二千円

●南砺市いなみ全国連句大会2013
形式…歌仙（未発表作品。独吟、脇起不可）
締切…平成二十五年三月十五日消印有効
応募料…一巻につき二千円

●平成二十五年年度岐阜県文芸祭連句部門
六月下旬頃に募集要項発表

詳細は猫養会内の各実作会などお問い合わせ下さい。また猫養会オフィシャルサイトの「サイトマップ」ページに「関連リンク」の「代表的な連句募吟」として各募吟サイトへのリンクを設置しています。詳細をネット上で公開している募吟もあります。

●猫養会オフィシャルサイト
<http://www.neko-mino.org/index.html>

●訂正

第八十九号（前号）10ページ、一段目最終行・誤「善の綱」↓正「善の綱」。

季刊 『猫養通信』第九十号

平成二十五年一月十五日発行

発行人 青木秀樹
猫養会刊

〒182-0003

編集人 鈴木了斎
東京都調布市若葉町2-21-16

印刷所 印刷クリエイト株式会社

